

令和3年5月21日

今更ながらの「令和」の精神

高岡市万葉歴史館 学芸課長 新谷 秀夫

「令和」という新しい元号は万葉集をもとにということです。
元号が決まった時に万葉集の歌をもとにという間違っただマスコミがいくつかあったんですが
正しくは、歌ではありません
万葉集の歌からとると、いわゆるキラキラネーム。
暴走族の落書きのような感じで、何の意味もない漢字が並びますので、歌から取ることは無い。
むしろ歌以外のところから取った。正しくは、万葉集の中に出てくる漢文からとられた。
中国語で書かれたところから取られている。それはどこからかということになると、
梅の花の歌三十二首 并せて序 という序文からとられている。
その序文はどこから始まるかということ、その次の「天平二年から始まって古と今と夫れ何か異ならむ。」
ここまでが序文です。
万葉集はすべて日本語で書かれているという風に思われている方がいらっしゃるのですが、
実は歌以外は、もともとは、全部中国語、漢文で書かれています。
天平二年正月十三日に、師(そち)、老(ろう)、あだ名ですね。現在の福岡県の大宰府の役所の長官。
トップの仕事を師(そち)と言います。老(ろう)というのは、年を取った男性が自分のことを言う言い方
です。ですから大宰府の長官の長老の家に集まって宴会を開いたという、ここから序文が始まります。
今回の元号は、この序文から冒頭から出てくるんです。
時に、初春の令月にして、氣淑く風和らぐ。この文章、漢文では、「于時初春令月、氣淑風和」あげてあ
りますが、ここの令月の令、風和の和をとって令和という二文字を使って「令和」という元号が作られた
わけです。ですから、万葉集からはとられていますが、歌からではなくて序文からとられているわけ
です。
この令和という元号は、実は学者たちからもう批判を受けているんです。
原文をみると令和の間に、四文字挟むんです。これは、実は大問題なんです。
今までの、日本の元号は原則、中国の本の文章からとられています。今まで過去の元号は原則、連続した
二文字を使うことが大前提でした。これをあえて離れた二文字を使っているということが一番大きな問
題になったわけです。
「令」は、もともとは、綺麗とか華麗とかいう、美しいというのが本来の字なんです。
昔の日本や中国では、画数の多い漢字は、同じ音の簡単な文字に置き換えるという決まりがあったん
です。そして、意味は元の意味を使うんです。
ですから、この令月というのは、美しい月というのが本来の意味なんです。もう一つ和というのは、聖徳
太子が日本で一番初めに作ったとされる憲法十七条の冒頭に、和を以て尊しとなすと始まるんですが、
「和」という言葉は、中国や日本では世の中の中心にある一番大事なものという考え方があるん
です。ですから、和がなければ国は成り立たない。政治は成り立たない。そういう考えが古代の中国や日本
にあるので、「令」と「和」のそれぞれは非常にいい意味なんです。

「美しい」というのは、古典の世界では、一番最高の称える言葉なんです。誉め言葉。最高の人にしか使ってはならない言葉。ですから、万葉集の中では日本そのものに使う例はありますが、原則、それ以外では使いません。源氏物語においても、麗しと言われるのは光源氏だけです。それほど最高のものに対して称えるときの言葉が麗し。ですから、「令」「和」を組み合わせたとするのは元号としては最高の組み合わせなんですね。ですからあの時の安部首相は元号の記者発表で、この言葉の意味をちゃんと説明しているんです。「麗しく平和とか和やかな状態を目指して、この元号を選んだんだ」というようなことを記者発表されたのはまさにこの言葉の意味は正しいんです。

ですから、この元号はよい言葉をとったんです。いい言葉を二つとったんですが、問題になる一つ目は、離れているということです。

それよりももっと肝心な問題があるんです。

明治以降、元号は、その元号の天皇がお亡くなりになったら、天皇のおくり名になる。つまり明治天皇が亡くなって初めて明治天皇。大正天皇も亡くなって初めて大正天皇。だから、平成天皇はまだお亡くなりになっていないので、平成天皇と呼んだらダメなんです、死んでない人に平成というのは。

ですから、上皇陛下とかいって呼び方を法律や、皇室典範を変えてまで決めなくてはいけないのは、原則、天皇の名前は死んでから決まる。平成はまだお亡くなりになっていないので、上皇。

さあ、問題はこれからです。令和の新しい天皇がお亡くなりになったら、令和天皇というんです。

実は、日本の天皇のおくり名は神武天皇から脈々と続く天皇の名前は、実は全部、漢字の本来の文字を使うんです。

令和の令は、美しいという漢字が難しいので簡単な文字に置き換えましたが、こういうのを中国の世界では「かしゃ」。仮に借りてという、仮借文字と言いまして、本来の文字ではないんです。歴代の天皇名は、一人として仮借文字の名前はないんです。本来の文字を使うんです。ということは、今の天皇がお亡くなりになると、史上初、仮借の、つまり本来の名前でない名前が付くという点で、一部の方々がこの元号が発表されたときに、こんな無礼なことはないと大騒ぎされたんです。無礼と言われても仕方がないって、元号を考えられた方は言葉の意味を重んじて、非常に意味のある言葉を持ってきて使われたんですが、結果的に、今の天皇がお亡くなりになったら、仮借文字の史上初の名前になる。それが、ものすごく問題視されて元号の発表直後、騒ぎ立てている方がたくさんいたんです。

私は、今の天皇がお亡くなりになったときに、もう一回問題になると思っています。仮借文字の天皇名が本当に認められるかどうか楽しみです。

一般の方が知らない元号の問題点二つをご説明したわけです。

①離れた元号は今までない

②仮借文字を使った元号もない。

そういうことを踏まえまして、この文章からとられた。

でも文章は「令和」という意味があるからとられたんです。

実は、あの時記者発表では全くふれられなかったんですが、この令和という言葉を取った「梅花の宴」

梅花の宴というのは、一つ意図して開かれている。この文章は読んでいったら長いので、文章の真ん中に宴会を開いた時の状態を説明したのが青い文章です。

天を屋根にしてというのは外でということ。野外で、しかも地面にそのまま座布団しいてということは、完全に野外の宴会だということがわかるわけです。膝を近付けて盃を飛ばすという表現は、非常に親しい間柄でお酒を飲むときの表現です。原則、昔の宴会は、公的な宴会はちょうど間に隙間ができて二列に離れて座るとというのが宴会の正式なパターンです。

ですから、膝が近づくことはないんですね。

真向かいに座って、それぞれ面と向かって座るということは一般的な中で膝を近付けてということは、横でピタッと座ってというわけです。しかも盃を飛ばすということは、正式な宴会では絶対しない。正式な宴会では、口を付けてそれで終わりといったような形ですから、それをこんな言い方をすることは、まさに親しい者の間で宴会を開いた。最後、みんなさっぱりとして、それぞれに気楽に振舞って、愉快になって満足したという形で文章は終わります。つまり、気の合った仲間の飲むような宴会でみんな満足して帰ったというのですが、これは、実は、ちゃんと参加した人を調べると上司から部下まで全部、身分順に人が並んでいるわけです。つまり、これは公式な宴会ということですよ。

今の宮中の晩餐会のようなもんなんです。その宴会で、みんな気楽にふるまって満足したということが書かれていますが普通はあり得ないんです。でも、そういうような気持ちで宴会を開いたと書いてあります。これは意図があるんですね。なんの意図かというのは、「君臣和楽」。

この四字熟語に意味がある。

当時、人の上に立つものは部下たちを集めて上手くコミュニケーションをとることが大事な仕事だったんです。これ、大伴旅人という大伴家持のお父さんが九州で開いた宴会だったんですが、この時、大伴の旅人という人は何を指したかという、当時の九州の役人をほぼ全部集めまして、ここに書いた四字熟語「君臣和楽」ということを指したんです。

君 上に立つもの、臣 その下で働くもの、その二人が和、和やかで楽しい状態。こういう状態で宴会を開くことを目指している。なぜかという、これ、古来の中国や日本では、理想の国家の姿なんです。一番理想的な国家は君臣和楽の状態である。理想的な国は、上と下が非常に和やかで楽しい状態にある、その結果、政治は上手くいって、豊かになるといったそういう考え方が中国や日本にあるんです。

ですから、当時日本の役人も上に立つものはこのことを強く意識する、上にあるものである以上、部下たちと上手くコミュニケーションをとって上手く国を動かそう。大伴旅人は九州全体を統括する役にいましたから、コミュニケーションをとることで何も問題が起こらない。日本全体をそういう国へという理想をもって、こういう宴会を開いているわけです。

当時、記者発表では四字熟語は、一切使わなかったんですが、万葉の学者ならこの梅花の歌の序文を使ったというならば、あっ、この意味があったんだと、誰もが気づくような文章なんですね。

この元号を考えた人が君臣和楽の理想の国家の姿、それを目指しているということがこの元号に込められたもう一つの想いということをぜひ知っていただければなと思うわけです。

あまり、普段、元号なんてことは、ご存じないかもしれませんが、令和という言葉に込められた意味はそういうことがあるということ、ぜひ知っていただければと思います。

こういう想いを込めた歌ということを知って、この元号に親しんでいただければと思います。

今までの元号にも、意味があるけれど、その意味は覚えられていない。それはなぜかという、もとは中国の本で一般の人は読まないような本なんです。その本からとられても多分、馴染みがない、それに対して今回の令和は、万葉集を元にされたということで、たぶん今までの歴代の元号の中で一番謂れが語られている。そういう点では、この元号は大変親しみがあるものだと思いますので、ぜひ親しんでいただきたい。

それと、この元号を考えた文章の元の 旅人という、家持のお父さんが書いたということで、当時、高岡は注目されたんですが、

旅人が目指した世界は、たぶん役人ならば誰もが目指しているはずなんですが、今現在、確認されたのは、家持が越中でやっているだけなんです。つまり、お父様が太宰府でやったことを、家持は若いころから越中へ来て五年過ごしましたが、その五年間でお父さんと同じことを必死になってやっている。

昔から、家持は、富山で宴会ばかり開いてる。酒ばかり飲んで歌ばかり読んでいたというのですが、酒飲むことが大事だったんです。

奈良時代もコミュニケーションをとる方法として、上司が部下を集めて宴会を開くということをやっていたので、それを越中時代、家持は必死に部下を集めてやっていたのは、あくまでも君臣和楽の本筋の目的があったんです。

それがうまくいった喜びの歌が、「春のうちの楽しき終へは、梅の花 手折招きつつ、遊ぶにあるべし」これ、実は その前の梅花の宴と言われるお父様の宴会に出てくる歌をそのまま使っているんですが、こういう歌を詠んだのは、やっと思子である家持がお父さんと同じことをこの富山で出来たという喜びを込めて、帰る間際になりましたけども、こういう歌を詠んだんです。

これ、意外と学者たちは注目する歌なのですが、これ富山では、あまり注目されていないみたいで高岡ゆかりの越中ゆかりの万葉かるたには残念ながら入っていません。

でもこれは、お父様が君臣和楽を目指した主張をこめて、それを自分も出来たんだと喜びを込めた歌だということ、もしこれから機会がありましたら、元号と高岡はこのくらい関わっているということ、これを機に知っていただければなあということで、手短ではございますが、あらためて「令和」に込められた想い、精神みたいなものを皆さんに伝えさせていただきました。

ありがとうございました。